

教育

■教育（1）日本の学生生活 平成 22 年 10 月 30 日

最近の学生は可哀想である。親からの限られた仕送りしかないからアルバイトをしなければ生活ができない者も多い。自分の将来を考えて専門分野でアルバイトができるのは極めてわずかで、ほとんどは居酒屋やレストランのチェーン店、コンビニ、量販店あるいはパチンコ店などに勤めている。私はお酒やパチンコが好きだからそこに足を運ぶと、しばしば教え子に出くわすこともある。そこでは安い賃金で夜遅くまで働かされ、異様な声をあげて接客することを強要されている。学生は労働保険や社会保険の加入の適用を受けないし、学生の間だけの短期間でしかも低賃金であることから、経営者にとっては格好の労働力の供給先となっている。もし日本の経済システムがこのような雇用形態で成り立っているとしたら甚だ不愉快である。

日本の学生に対する奨学金制度も不十分である。奨学金の返済を免除されるのは極わずか、大部分の学生には将来大きな「借金」として残ってしまう。外国人留学生に対しては国も企業も手厚い保護政策を講じている。自国に余力がないのに他人を支援するようないい加減な風潮が蔓延しているのも理解できない。

私の学生時代には、東京の本郷近辺に県が支援する下宿が沢山あった。私は、北海道出身だからそのような施設がなかったけれど、親身に思ってくれる大学教授のおかげで書生まがいの学生生活を送ることができた。当時の下宿といい、研究室といい、そこに潜り込んで先輩や後輩と酒を交わしながら夜遅くまで議論をしたものである。それが社会性や学力を身につけるきっかけとなった。

学生はそれぞれ個性的で多様な能力を持ち合せている。それを思いっきり許容できる教育環境が必要で、中途半端でがんじがらめの規準で拘束してはいけない。大学は居酒屋でもなくコンビニでもないのだから。

■教育（2）大学教育 平成 23 年 5 月 22 日

現在の大学教育は、各種の資格を取得するための予備校のようである。教室は学校型と言われるように対面形式で、教員は学生より一段高いところから一方的に教え込む。期末には、規格、規準を問う試験で学生の能力を評価し、多くのマニュアル人間を社会に送り込んできた。そこでは、個人の能力を引き出し、感性を育む教育を行うことを難しくしている。これは、政府が全国一律の基準で資格取得に特化した要件で大学を評価するため、大学のカリキュラム編成の自由度を著しく阻害する要因である。

また、教育に関する審議会や審査機関など多くの組織や外郭団体が設置され、大学の教育評価が行われている。審査委員はどのように選任されるのかは知る由もないが、ご多分にもれず標準化活動のわけのわからない言語を發し、「教育改革の支援活動である」ことを誇張して審査にあたる。この成熟した社会においてどんな小さな大学でも基本理念や教育のための仕組が整備されている。戦後復興と同じような認識の政府の対応と、非生産的な審査機関による押し付けがましいサービスに困惑している。

東日本大震災で、自衛隊の隊長と原発所長の行動のみが何故か勇気を与えてくれた。外見で人を判断してはいけないけれど、星の王子さまの「心で見なきゃ物事はよく見えない」ということが身につけている人なのだろう。国家の存続が危うくなるような政府の危機管理への対応やそれを批判して社会不安を助長するだけのマスコミの対応に憤りを感じず。政治家も原子力学者の言葉もむなしく聞こえる。これまでの科学技術に対して疑心暗鬼になったのは私だけだろうか。

学生のゼミで一流の建築家の設計した建築を調査させる。指示しなくても、自然とリーダーが現れ文献やインターネットで調査建築の内容を調査し、調査計画をつくる。調査項目、方法、工程、討論と夜の懇親会

まで計画する。その時の学生の伸び伸びとした行動は、講義中には見ることはできない。今の学生は多様な個性と能力を持っている。大学の試験で一番じゃなくても、社会で「Only One」になれる潜在的な能力を持っている者も多い。これまでの政府主導の教育体系の押し付けは甚だ迷惑である。

■ 教育(3) ナショナル・キャピタル 平成24年2月11日

学生は、50年、100年先の国家の形を創造するために、高い志をもって学ばなければならない。我々は、先人の投資によって形成された社会基盤の恩恵を受けて生活している。原子力発電所は大変な失態をしてしまった。私は、社会基盤整備などに少なくとも貢献したと思うけれど、達成途上の段階で現役を引退することとなった。建築を志す者は、現役時代の自らの投資の恩恵を得ることがことなく去らなければならないのが常である。新自由主義による賭博的な経済で世界秩序は乱れきっているが、それによって先人の投資した社会資本を食いつぶしてはならない。

住宅は戸数が充足されたといわれるが、居住水準を満足するものをまだまだ建設しなければならない。新幹線や高速道路網は、国内流通はもとより地方の発展のためにも必要である。農林漁業は、食糧確保や国土保全のためにも重要であり、新エネルギー開発のためにも有効な資源である。自然環境保全、伝統・文化などの継承も必要である。このような社会基盤が整備されることによって、人口が減少することもなく、外国人の移入も盛んになる。

福沢諭吉は「愛国の意あらん者は、官私を問わず先ず自己の独立をはかり、余力あらば他人の独立を助け成すべし」と説いた。これは、日本人特有の「相互助け合いの精神」からするとなかなか受け入れることに抵抗があるかもしれない。しかし、これからの世界情勢は国益の争いが多くなっても少なくなることがないだろうから、諭吉の言葉を真剣に受け止め自らの社会基盤整備に資本を投入すべきである。

大学は、グローバル化の名のもとに9月入学制を導入しようとしている。英語での講義をも強要している。日本の伝統や文化を英語で教えることは無理である。日本に永く滞在して、日本の伝統・文化を日本人より深く理解している外国人も多くいる。それらの外国人は、日本人以上の流ちょうな日本語を使って、日本の社会に溶け込んでいる事実がある。先人が50年、100年先を見通して投資してきた伝統・文化や社会基盤を大学教育によって一瞬のうちに崩壊させることがあってはならない。

■ 教育(4) 感性を育む

建築を指向する学生は、「感性を育む」ことが重要である。社会に出て建築に携わると、直接・間接的に、もの造りに対して関わらなければならない。建築の設計・施工の分野では、我々の学生時代と異なって、あらゆる標準類が整備されている。しかし、同じ工事費の建築であっても、設計や施工に携わる人によって、その出来栄えが大幅に異なることに気がつくだろう。これは、そこに携わる人々の感性に依存する部分が大いからである。

もの造りにあつては、空間・色彩・美しさ・質感・ゆとり・快さ・潤いなど、標準類で表現できない要素がある。これらは個人の感性によって左右される。感性は、両親からさずかった遺伝子と、育った環境に影響を受け、幼児期においてある程度形成されるという。これは、家庭・社会・自然環境などにおいて体験学習を通じて成長する。しかし、学生は、受験勉強一辺倒の、知識詰め込み型教育の弊害で、少年期における感性の成長が停止した状態で大学に入学してくる。だから、大学教育においては、あらゆる現場に足を運び、見て、聴いて、触れるなど、継続して訓練をすることが重要となる。

本田宗一郎は「言葉とか文字では人は動かない」、松下幸之助は「一心不乱」そして、五島慶太は「工事現場の陣頭指揮」を企業理念としてきた。これは企業における管理者教育において、率先垂範の偉大な経営者の言葉として紹介されるが、現在の学生教育にもその思想はあてはまる。

建築分野では、建築設計と構造設計を主体に、その周辺の技術を教えることが国土交通省から義務づけら

れている。科目、単位数、シラバスの内容まで詳細に指定されるから、大学としての自由度は極めて少ない。まるで、大学は一級建築士養成の予備校のようである。講義も教科書中心とならざるを得ない。建築の基盤材料であるコンクリートを造ることを知らないで、鉄筋コンクリート構造の破壊状況も知らないで卒業していく学生がいるとしたら、日本の建築の将来が危ぶまれる。「ドジャースの戦法を熟読しても長嶋にはなれない」、これが私の教育理念である。